

朝鮮

幼少時の生活と引揚げの記録

群馬県 浅野敏夫

はじめに

私は、日本の敗戦、そして無残極まりなかった引揚げという一大変革時にあつて、傍若無人の振る舞いをしていたソ連兵や満人の暴行のなか身一つであの満蒙の奥地から逃れてきた開拓団などの人たちや、朝鮮半島三八度線以北での共産匪の迫害の下に、ようやくのこと引き揚げてきた人々のような、悲惨な逃避行も体験せずに、比較的早く日本内地に帰ることができました。それは、幸いにも朝鮮の政治、軍事、司法、そ

して行政の中心であつた京城（ソウル）で終戦を迎えたからでした。したがって私の体験は『平和の礎』に引揚げの苦勞を書いておられる多くの方々の、それこそ血と涙のにじみ出るような苦勞とは、比較にならないものであり、これが私の引揚げ苦勞記録ですと言つて書くことには、随分とちゅうちょさせられました。

しかし、あの敗戦によって多くの日本人の受けた心身の痛み、特に国策に沿つて海外に雄飛し、腰を据えて生活をしてきた日本人の苦しみ、悲しみ、そして悔しさと惨めさは人によってその感じ方は異なるものの、それぞれの人生に大いなる衝撃を与えたであろうことは、間違ひの無いことです。私のような者も、引揚者の中にはいたということを知ってもらふことも、

あながち無駄なことではないと思ひ直して、引揚げ記録を書くことを決心しました。

今までに短い文章も書いたことがなく、一貫した筋が通っていないかとも思いますが、平和の尊さ、有り難さについては、人後に落ちないほどに肌で感じている者として、自分の体験を恥ずかしながら書き残すことも、古い先短い者に残された最後の責務でもあると考へて、恒久の世界平和への願いを込めて、つたないながらペンを執ることにしました。

一 海外移住の動機と家族

私の父、浅野友一は昭和二（一九二七）年三月に東京帝国大学工学部の機械工学科を卒業しました。このころの日本は、積極的に中国大陸、特に中国東北部に進出するいわゆる大陸政策を国策として強力に進めていた時代で、「五族協和」「王道楽土の建設」のスローガンのもとに、新国家建設を目指していました。日本人のだれもが一分の疑も持たずに己の持てる力を理想国家の実現にぶつけて、理想とロマンを求めて大なり小なりの努力をしていた時代です。

父もその理想に燃えて、中国大陸で働くことを熱望していましたが、幸いにも世話をしてくれる人がいて、昭和二年四月に、当時関東州の旅順市に開設されていた旅順工科大学に、講師として招聘されて赴任し、翌年の六月には助教に任命されました。助教になった年の八月十四日には、埼玉県出身の鴨田まさと結婚しました。それが私の母です。当時、母は旅順の人と結婚するということが、随分悩んだということでした。旅順と聞けば、あの日露戦争における乃木將軍に代表される二百三高地での激戦地であることや、同じく日露戦争での旅順港閉塞で名高い、広瀬中佐と杉野兵曹長の話などで、いずれも激戦地としての血なまぐさいイメージしか持っていなかったようで、近々に嫁いでいく先の見知らぬ土地に対して、大きな不安を抱いていたそうです。考へてみればこれも当然なこととて、その気持ちには無理からぬところがあります。そんな「フィアンセ」の気持ちを十分に察していた父は、その不安を拭い去るために、「豊かで、平和である日常生活のこと」を細々と書き、それに自分の胸の

うちも書き加えた手紙を、旅順の花「アカシヤ」に添えて、度々送っていたそうです。そして、父と母の新しい生活が、旅順において始まったのです。

昭和四年十月二十二日に、関東庁旅順病院の産室で私、敏夫が浅野家の長男として出生し、次いでちょうど二年後の昭和六年十月には次男の和夫が、旅順市常盤町にあった自宅で生まれました。親子四人の何一つ不足することのない、平和で明るい家庭が旅順市内で営まれていました。

その後さらに、昭和十年一月に長女として公子が生まれ、六歳になっていた私を頭にして三人の子供を抱えて、母は大変に忙しい日々を過ごすようになりました。そのように子育てで大変な家庭に、大きな変化が起きました。それは、昭和八年に教授に任ぜられた父がドイツに留学を命ぜられ、昭和十年三月に単身でドイツに赴任してしまいました。父は、母と私たち子供三人だけで旅順に残って生活することを大変に心配して、群馬県の桐生市にある父の実家に身を寄せることを話し合って、私たち子供は、初めて両親の祖国であ

る日本の土地を踏みました。私は早速に小学一年生として桐生市内の小学校に入学し、友達もできて、勉強や遊びに夢中になって過ごしていました。

父はドイツからアメリカに回って翌年の春に戻ってきましたが、桐生でゆっくりする間も無く、すぐに旅順工科大学に復帰することになり、慌ただしく一家そろって旅順に戻り、再び平和で豊かな生活を迎えました。

その後、更に弟と妹が生まれて、終戦のときには男三人、女二人の計五人の兄弟となりました。旅順に戻ると、すぐに旅順師範学校附属小学校に転入ができて、結局六年間を同じ小学校で過ごせることになりました。

旅順での思い出といえば、何と言ってもすぐに頭に浮かんでくる情景は、アカシヤの花が爛漫と咲き乱れて、甘い蜜の香りが辺り一帯に広がり、鼻の中まで入ってきて、何となくその香りに酔いしれてしまうことです。アカシヤの花を一つ取って口に入れると、その甘さが口の中いっぱいに広がり、とても甘く感じて

しまいます。また、旅順港内でとれるカニも思い出されません。港内に小舟で出掛けてカニ取りざるを海中に入れると、すぐにざるいっぱいのカニが入っていて、それを家を持って帰り食べたものです。そのおいしかったことも、アカシヤの密の味と共に忘れられません。夏になると、旅順港の近くにあったプールで一日中泳いでいましたが、これも楽しかった思い出の一つです。冬は冬で、大正公園の特設スケートリンクで、思う存分にスケートをして滑る楽しみがありました。

このスケートリンクは、スピードスケート用でしたので、スピード用のスケート靴を、父と一緒に大連まで買いに行ったことを覚えています。旅順の動物園も世界的に有名で、野放しされた小動物と遊んだことも、懐かしい思い出となっています。本当に旅順はのどかで、優雅な都会でした。

附属小学校を卒業すると、希望どおりに旅順中学校に進学しましたが、父が京城大学へ転任となったので、旅中には一日も通学することなく、昭和十七年三月に一家をあげて朝鮮の京城に移り住みました。

二 京城での生活と敗戦

京城では取りあえず市内に居住しましたが、しばらくしてから京城郊外の清涼里の東にある典農町という所に移り、終戦までそこに住むことになりました。私は、京城市内にある旭ヶ丘中学校に転入学しました。二年間は順調に中学生生活を送っており、日々の授業も時間割りのとおりに行われていて、戦時下ではありながら、比較的落ち着いた学生生活を過ごしていました。もちろん、学科の一つとしての軍事教練も、内地の中学校と同じようにあって、軍国少年らしく一生懸命に励んでいました。

ときには夜行軍で、京城の学校から仁川港まで、三八式の歩兵銃を肩に完全武装で行軍をしました。四列縦隊で歩くのに最初のころは、皆元氣よくさっそうとして歩いていましたが、時間の経過と共にだんだんと疲れが出てきて、足並みが乱れ始めました。夜間になると、疲れに睡魔が加わってきて隊列も乱れてきました。前の者と離れないように努力をしますが、ちよつと油断をすると前列の学友との間が広くあいてしま

い、教官から怒鳴られることがちょいちょいありました。

また、上級生のグライダー訓練の見学もありました。グライダーに乗っている人はよいのですが、グライダーの先端につながれた二本の牽引索を引っ張る人たちが汗びっしょりになっている様子を見て、グライダー訓練も大変だなあと感じたものでした。

昭和十八年、十九年ごろになると、先輩や同級生のうちにも陸、海軍の学校などに入校する者が多数出てきて、京城駅まで全校生徒で見送りに行くようになりました。そんなある日の学校で、良く晴れた空を一機の飛行機が、北の方に向かって飛んで行くのを見ました。何ということもなく、校舎の外にまで出て見上げていたのですが、きれいな四条の白線を長く美しく残して飛び去りました。後で思い出すと、それがあのB29爆撃機だったのです。B29との初対面でした。そのころはまだB29を眺めても、ただきれいだなあとと思うだけの、のんびりした穏やかな京城でしたが、日本の内地ではあちらこちらの大大都市への爆撃が始まった

ようで、連日の新聞、ラジオでその被害状況が報じられていました。

戦局はだんだんと容易ならざる方向へと進んでいきました。学徒動員が京城市内の各学校にも及んできて、私たちの同級生は、京城の中心から約五十キロメートル西にある、仁川の軍需工場に動員されました。当然、学生は全員親元から通うこともならず、軍需工場の寄宿舎で寝起きをする生活となりました。同級生五、六人が一部屋に入り、それこそ起床から食事、工場での作業、そして就寝まで文字どおり寝食を共にすることになりました。勤務は、昼間勤務と夜間勤務の二交代制で、一週間ごとに昼、夜を交代して働かされました。夜間勤務の週には、土曜日の朝勤務を終えると、すぐにそのままの姿で京城の家に飛んで帰り、土、日とゆっくり過ごして、月曜日の朝早くに工場に戻り、それから昼間勤務を一週間するというサイクルでした。

家に帰ると玄関先に母が待っていて、すぐに着ている物を全部脱がせられ、洗濯したものに着替えさせら

れました。それは母が、工場から虱を持ってくるのではないか？　ひとたび虱が家の中に入ったら、家族の者全員に大変な迷惑を掛けるからと心配していたからです。いわば、虱の水際せん滅作戦ともいべきことでした。

工場では、小銃の弾倉部に使うバネを製造していましたが、仕事の内容は単純で、あまり頭を使うようなことは無く、繰り返し作業でした。

夜勤の週のある夜、工場の敷地内に置いてあったアセチレン入りのドラム缶が突然に爆発して燃え上がり、真っ赤な炎を空高く吹き上げましたが、辺りが暗いので余計に大事に感じて、恐ろしくなってきました。一時、不法分子による破壊活動ではないかといううわさもありましたが、大事にならず一件落着きました。しかし、小雨が降っていたようで炎がひどく、勢いよく燃え上がったのではないかと思います。今までに経験したことのない恐ろしい夜だったので、今でも生々しく記憶に残っています。

また、ある日の昼間勤務中に、突然空襲警報が発令

されて、避難命令ができました。工場のすぐ裏手の山の中腹に掘ってあるたこ壺に入りましたが、一つのたこ壺に一人が入るようになっていて、恐ろしさで孤独感とで震えながら入っていたことを思い出します。

たこ壺に入って震えているときに、何気なく北の方を見ていたら、澄み切った上空で我が方の戦闘機がB29を攻撃している様子が見られました。味方の一機が、下から急上昇して敵機の近くまで接近したと思いい、手を握りしめて見つめておりましたら、すぐに火を噴いて、くるくると回りながら落ちていきました。遠くの空ですから、よくは分かりませんが、手に汗を握りしめながら見つめていました。戦争らしい戦いの様子を身をもって体験したのは、生まれて初めてのことであり、自分でもかなり興奮していたようでした。空襲警報が解除になり仕事場に戻っても、しばらくはその話で持ちきりでした。

八月十五日は昼間勤務でしたが、宿舎から工場に着くと、「今日、十二時に重大放送があるから全員、正午までに工場広場に集合するように」という指示があ

りました。何だろうかとは皆はいぶかしく思っていました。だが、作業が始まるとそのことは忘れてしまい、生産に熱中していました。正午少し前に再び指示があつて、全員が工場前の広場に集まりました。広場にはラジオが一台、朝礼台に置かれていました。正午になる
と「君が代」が流れてきて、アナウンサーの声で「ただ今から、かしこくも天皇陛下おん自らのお言葉があります」と流れてきました。その後は雑音がひどくて、明瞭には聞き取れませんでした。が、天皇陛下直々のお声での終戦のお言葉でした。工場の人々、監督の先生方、そして我々学徒も皆肅然とした気持ちになつて、聞き入っていました。そのうちに、涙を流す者、声を出して嗚咽を始める者、立っていることができずに座ってしまう人など、様々な反応が現れてきました。私は呆然としたままに、何の考えも浮かんできませんでした。

その後は、監督の教師の指示により宿舎に戻り、身辺整理をしてから、各々自宅に戻ることになりました。

私も、典農町の家に戻りました。家には父もいましたが、私が家の中に入ってもしばらくは黙っていて、口もききませんでした。そのうちに、突然に独り言で「日本は負けたんだなあ!」と、言いながら涙を流していました。私も父の態度を見て、「これからどうなるのか!」と、考えるようになりましたが、中学生の身ではどうすることもならず、何も考えられませんでした。これから先のこととは、すべて父や母に任せて、自分はそれに従っていくより仕方がないと考えました。ただ、そのときに真っ先に頭に浮かんだことは、何としても一日も早く日本に帰らなければということでした。しかしながら、敗戦という今まで考えてもいなかった事態になって、果たして日本に帰れるのか、このまま京城で、虐げられながら生きていかなければならないのではないかと、という不安感がすぐに頭の中いっぱいになってきました。

三 引揚げ準備

典農町の自宅周辺は、原住民の家が多い所であつて、敗戦の報が伝わるととたんに、日本人の家とみる

と投石をしたり、塀をこわしたり、落書きなどの嫌がらせをしました。私の家でも、門扉に大きな石を投げつけられて、扉の板が割れるということがありました。また、木塀にはペンキで嫌がらせの文字を一面に書かれたりしました。外に出ることに恐怖を感じるようになり、どうしても必要があつて出ると、朝鮮の子供にいろいろといじめられたりしました。そこで、ここにいたのでは危険で、日常の生活にも支障をきたすということで、引揚げの際に便利なように、京城駅の近くの南大門にあつた、父の学友の藤森さんの所有する建物に移り住むことになりました。藤森さんは、味噌・醤油の醸造・販売の会社を経営しており、その会社の建物が広くて比較的に安全であつたので、そこにお世話になることとなり、結局、引揚げが決定した十一月ごろまで、そこで日常の生活を過ごすことになつてしまいました。

来る日も来る日も、何もすることもないので、工場にあつた製品運搬用のエレベーターを兄弟で動かしては、退屈を紛らわしていました。その工場の倉庫に

は、当時はもう品不足でなかなか口に入らなかつた、角砂糖などが山のようにあつて、それをつまんで口に入れていましたが、これで随分と空腹を満たすことができました。

時には、不要品を市内の繁華街に持って行って、路上に並べて売って、生活費を稼いだこともありましたが、その場所は現地人の往来も激しく、歩きながら声高にしゃべっているのが、嫌でもそれが耳に入り、いろいろと情報を得ることができました。

終戦までは、現地人はほとんど朝鮮語を使わずに、日常は日本語で会話をしていました。敗戦になると手の平を返すがごとくに、母国語である朝鮮語で話をするようになりました。一夜にしてがらんと変わった言葉に、敗戦というのはこんなにも人の心を傷つけ、そして惨めな思いにさせるのかと、しみじみと感じたものでした。

四 引揚げ開始

しばらくの間、引揚げ開始を待ちながら避難民生活をしていましたが、いよいよ引揚げが開始されて、引

揚列車が出るという連絡が入り、家族全員はそれぞれに大きなトランクに持ち物をいっぱい詰めて準備をしました。特に母は、当時妊娠していて大きなお腹をしておりましたが、その大きなお腹にひもを巻き付けて、そのひもに圧力釜とか、ベンチ・のこぎり・金づちなどの大工道具を入れた箱などをくくりつけて、ぶらさげていました。

いよいよ引揚げが開始されました。京城駅に各人が荷物を、背負ったり両手にぶらさげたりして集まり、有蓋貨車に乗せられました。貨車はすし詰めになったので、各々荷物の上に乗ったり、荷物と荷物の間にやっとな腰を下ろすようになっこうで出発しました。

途中では、沿線の住民が私たちに向かって石を投げ、口々に何か大声でわめいていましたが、何を言っているのか少しも分かりませんでした。スピードがちょっと落ちてきたところで、投げられた石が当たってけがをした人がありました。釜山に到着するまで、約四、五日も貨車の中ですし詰め状態になっていました。

釜山駅でやっとな降ろされて、収容所であるお寺まで歩いて行きましたが、途中の所々の道端に大きな荷物が置いたままになっているのを見受けました。それはおそらく引揚者の人が、そこまで何とか持ってきた自分の荷物が重たくて、歩くのに耐えられなくなり涙をのんで捨てていった物ではないかと、歩きながら想像していました。

収容所では約一週間ぐらい待機させられていたと思いますが、はつきりした記憶はありません。その間にも、現地人の襲撃があるといううわさが入ったので、若い男の人が数人選ばれて夜間の警備にあたりましたが、私たちのグループでは何の被害も受けることなく、平穏無事に過ごすことができました。

昭和二十年十一月初旬、待望の引揚船が釜山港の埠頭に接岸し、私たち家族も、全員無事に乗船しました。今でも忘れられないのは、乗船した日の天気澄みきった青空で、私たち引揚者の前途を祝福してくれるような気持ちのよい快晴だったことです。

船内も、さきの有蓋列車と同じように詰め込めるだ

け詰めて乗船させているので、窮屈で窮屈で、座っていても身動き一つできない有様でした。私は、ずっと甲板に出て過ごしていました。甲板にいたためにはつきりと見ていて分かったのですが、この引揚船は片側に傾いていて、このままでは無事に内地の港にたどり着くことができないのではないかと心配でした。更にもう一つの事実は、航海中にアメリカ軍の空からの攻撃で、撃沈されたと思われる船のマストだけが、あちらこちらの海面から突き出ているのを多数見たことです。無残な姿に、呆然としたものでした。もっとびっくりして冷や汗を流したことは、本物の機雷が次から次と波間に浮いていたことです。ここで機雷がぶつかって爆発したら、それこそ命は無くなると思つて、機雷が通り過ぎるとほっと胸をなでおろしていました。しかし、船はその間を上手に避けて、航行して行きました。

釜山港を出航して約二日ぐらいかかって、内地の港に入りました。そこは山口県の仙崎港という漁港でした。船上から見た日本の島々は、青々としている島も

あれば、反対に山肌がはげあがって赤土がむき出しのままになっている島など、様々な様相を呈していました。多くの引揚者が経験したであろう強制的な抑留生活をすることもなく、ただひたすらにトランクを持ち歩いて帰国したという思いが先に立ち、目頭が熱くなってくるのを感じながら下船しました。

仙崎港では、地元の婦人会の人々から差し入れられた、一人に二個ずつの、大きなのりで巻いたお握りのおいしかったことが強く印象に残っていて、今でも忘れられません。

食事をした後には、どこだったか今となっては知る由もないことですが、全員がアメリカ兵に連れられて、地下室のような薄暗い所に行つて、ホースのようなものを首から突っ込まれて、体中に白い粉を吹き付けられました。後に、それが当時有名になった、DDT粉末だったことが分かった。

消毒が終わってから解放されましたが、私は箱形の本製のラジオを持っていましたので、それに目をつけたアメリカ兵が、「それをよこせ！」と、父に言つて

いるのが聞こえました。ラジオとしての機能はこわれていて使えなかったので、それを説明して取り上げられることを免れたという小競り合いもありました。

仙崎駅からは、美祿線、山陽本線、そして東海道本線と乗り継いで東京に向かいましたが、どの列車も大変な混雑で、車内も各駅のホームも混乱した状態でした。座席に座ればよい方で、座席の下や通路にも人がいっぱい腰をおろしているので、足の踏み場もない有様でした。私たち家族は、列車の便所の中に大事に持ってきたトランクを積み上げて、その上に交代で座りました。

途中、広島では原爆の爆心地にあるドームが見えませんでした。鉄骨がむき出しになり、レンガ造りの塙が大きく崩れていて、原爆の威力とその破壊力のすさまじいのはびっくりしました。後年に広島を訪れる機会があったので、実際に原爆ドームや原爆資料館などに行ってじっくりと見ましたが、深い感動を受けました。また長崎でも原爆中心地点に建っているあの大きな像を感慨を込めて拝見しました。

列車はやっと東京駅に到着し、そこから更に乗り換えて東北本線、両毛線に乗り継ぎ、やっと父の出生地である桐生駅に到着しました。

五 引揚げ後から生活安定まで

桐生駅に到着したのは、昭和二十年十一月の中旬だったと記憶しています。駅に着いてから、父が駅前の公衆電話で初めて実家に帰ってきたことを連絡しました。しばらくすると、親類の人がリヤカーを引いて迎えに来てくれました。ここまで後生大事に持ってきたトランクが急に重たくなって、持って歩くことも大変な気持ちになっていたので、大変助かりました。リヤカーに荷物を積んで、その後をとぼとぼと歩き、約二十分ぐらいでやっと父の家に着きました。父の名義になっている家は、以前から父の妹家族に貸していたので、空襲でも焼けずに何とか残っていました。母が、大きなお腹をしながら腰の回りにぶら下げて、大事に持ってきた大工道具などは必要がなくなりました。母は帰ったらまず家を住めるように修理しなければならぬと考えて、他の必需品を犠牲にしても大工

道具だけには必要になるだろうと思って、大事に持ってきたのでした。今思えば無駄な努力だったとも言えますが、引揚げ当時の苦勞を永く忘れないために、これらの大工道具は我が家の記念品として大切に保管しています。

桐生に引き揚げてから聞いた話では、桐生駅もアメリカ軍の戦闘機による機銃掃射を受けたそうで、大變な被害を出したとのことでした。また、桐生市は地形的に広島や長崎に似ていたので、原爆投下の候補地にもされていたという話でした。家だけでも焼けずに残っていたのは不幸中の幸いであって、心の慰めになりました。大きなお腹を抱えて引き揚げてきた母は、昭和二十一年三月、無事に男の子を生みました。四男の保夫です。母の苦勞は言うに言われぬものであったと思います。

一家九人の大家族で一番困ったことは食糧です。隣組で、ときどきジャガイモやサツマイモなどの配給がありました。が、とても九人の腹を満たすことはできませんでした。弟と二人で、桐生から少し奥に入った新

里村の農家までリュックサックを背負ってサツマイモの買いたしに行きました。一週間に二、三回の割合で通ったものでした。ときには警察の手入れがあるといううわさから、電車に乗らずに線路沿いを約一時間以上かけて、歩いて戻ったこともありましたが。買いたしてきたサツマイモが食事の主力で、これで何とか家族全員は飢えをしのいでいました。

私は、昭和二十三年三月に旧制中学の二年を終了して、学制改革により新設された新制中学の三年生になりました。通学は下駄履きでしたが、靴下などは当手に入れることはできませんでしたが、学生服も叔父のお古をもらって、体に合うように母が直してくれました。

高校に入ってから、苦しい家計を少しでも助けたいと思い、搾乳した牛乳缶を運搬するアルバイトに精を出していました。一斗缶三本を、自転車の荷台に一本、両側に一本ずつを乗せて、約一時間の道のりを桐生市内の牛乳販売所まで運ぶ仕事でしたが、現在のように舗装された道路ではなく凸凹の激しい砂利道で、

ペダルを踏み込まないと前に進まないような道でしたが、雨の日も風の日も休まずに、とにかく一生懸命に働きました。

昭和二十五年には、幸いにも群馬大学工学部に入学しましたが、一年時は桐生市内にあった同大学の工学部で、履修科目の単位が取れたので、家から三十分ぐらいの所を歩いて通いました。二年時以降は、前橋市にあった本校に通学しなければならず、母にあまり負担を掛けたくないで、朝食は自分で米を研ぎ炊飯してみそ汁を作り、それを食べて七時十五分の電車に乗り、五十分かかって前橋に通いました。自分ながらよく頑張ったものと思っています。

卒業後は教職の道を選び、約三十三年間桐生市に居を構えて、その道一筋に精進しました。弟、妹たちもそれぞれに安定した生活を送ることができて、平和で幸福な人生を過ごしています。

戦前から戦後、そして現在を生き抜いてきた者として、もう戦争はこりごりです。一日も早く、明るく楽しく生活のし易い平和な世の中になってほしいと願う

ばかりです。

激変の北朝鮮で

東京都 林 耕蔵

国際電気通信（株）に入社

明治生まれの父母は、大正十二（一九二三）年九月一日の関東大震災により日本橋で被災した。父は関西に旅行中で、母一人では、四人の子供を連れて逃げるのが精いっぱい、金品を持ち出す余裕などは全然無かった。親類に身を寄せたが、後に郊外の杉並で洋服店を開いた。

世の中は次第に軍国主義の時代となり、食糧、衣類などは配給切符制となり、国策で個人商店などは整理または集約されて、廃業に追い込まれてしまった。軍需産業優先は更に進んだが、父母は年令のせいもあり時流に乗れず、適齢期になった子供たちは兵隊へ取られるなどで、生活には苦勞をしていた。家には病人も